

## サットン・フーの大発見

1926年、イングランド東部、サフォーク州のイプスウィッチ郊外、デベン川を望むサットン・フーの広大な屋敷に、ある裕福な夫妻が結婚と共に移り住んだ。その邸宅の窓からは謎めいた塚が並んで見え、1935年に夫が病没した後、友人たちの勧めで、夫人がその塚の謎を解き明かすことを決心したことから物語が始まる。1937年、夫人は地元の歴史家の紹介で、近くのイプスウィッチの町にある博物館に相談を行い、調査担当者として、庭仕事で生計を立てる民間の考古学者バジル・ブラウンに白羽の矢が立った。夫人がスポンサーとなり、1938年、手始めに3基の墳丘墓が発掘され、続けて1939年6月、1号墓で行われた発掘調査がまさに世紀の大発見となる。全長27mの朽ち果てた木製船が墳丘の下に埋もれているのがわかり、しかも、船内の部屋から遺体に副えられた豪華な宝物の数々が、未盗掘の状態で見つかったのだ。

発見された宝物には、有名な銀製の兜のほか、戦士にふさわしい剣や盾、金や銀のブローチ、皿、リラ、角杯などがあり、いずれも精巧な装飾が施され、当時の工芸の粋を集め



写真1 サットン・フー2号墓

たものばかりだ。出土した金貨には西暦625年の銘を刻んだものが含まれ、7世紀の初め頃、アングロ・サクソン時代に埋葬がなされたことも明らかになった。まさにタイムカプセルのようなこの大発見は、大きなセンセーションを引き起こしたが、ほどなく、第二次世界大戦が勃発し、9月には調査終了となった。出土した宝物は、その価値が3万ポンドと見積もられ、その所有権が問題になったが、審問の結果、夫人の所有と決まり、全てが国に寄付された。豪華な副葬品とともに葬られたサットン・フーの被葬者はいったいどのような人物だったのだろうか。

## アングロ・サクソン時代と英雄叙事詩

紀元410年、ローマ軍によるブリテン島の支配が終了し、ローマの都市や邸宅が崩壊したあと、5世紀のイングランドには、スウェーデン、デンマーク、オランダ、ドイツなどから、アングル人、ジュート人、サクソン人のゲルマン系の人々が海を越えて押し寄せ、小さなコミュニティを築いて定着した。やがて彼らの中から有力な一族がリーダーとなり、小さな王国を次々と打ち建て、乱立した国家の中から7国家が台頭する。このアングロ・サクソン人たちの話す言葉は古英語で、彼らこそがその後のイングランドの基礎を築き、現在の住民の先祖となったのだ。6世紀、アウグスティヌス帝による布教によってキリスト教が導入されたものの、アングロ・サクソン人のほとんどは、伝統的な異教の神々を崇拝していて、たとえば、Weden, Freya, Thorといった神々の名は、今日もなお、曜日の名前として生きている。



写真2 王が葬られた船室の復原

8世紀の初め、歴史家にして僧侶だったベネラブル・ビーデは、7王国のうち、現在のノーフォークからサフォークに広がるイースト・アングリア王国の王宮が、サットン・フーから約6kmのレンドルシャムにあったと記している。サットン・フーの舟葬墓は、副葬品の豪華さから常人の墓でないことは誰の目にも明らかで、その被葬者は、624年頃に没したイースト・アングリア王レッドウォールドの墓ではないかというのが大方の推定だ。

同じ8世紀に成立したとされる英雄叙事詩『ベオウルフ』は、イングランドに定着したアングル人が故郷の北欧を舞台にした物語を古英語で記したものだ。その「序詩」に語られたデン人の王シュルド王の舟葬では、船に武器、甲冑、刀剣、胴鎧などの宝物が積み込まれ、帆柱脇に安置した王の胸元に数々あまたの宝物が載せられる。そして王の頭上には王権を象徴する金糸の幟を立てられて、海原へと送り出される。

『ベオウルフ』では、さらに、現在のスウェーデン南部の地に住んでいたイェーアト族の勇士ベオウルフの生涯と、2度にわたる怪物との戦いが語られる。第1部ではデネ(デンマーク)のヘオロット城を夜な夜な襲っていた2人の巨人、グレンデルとその母親と、若きベオウルフの組み討ちが描かれ、第2部ではデネ王に就いて老域に達したベオウルフが、塚の宝物を守る炎を吐く竜を退治しに赴き、そこで苦戦しつつも竜と刺し違える様子が描写される。名剣ネイリングが竜の手強さに砕け散る隙を突き、竜はベオウルフ王の喉もとに噛み付き、致命傷を与えるが、同時に王は短剣で竜の頸を切り裂き、竜を仕留める。ベオウルフは宝を眺めながら息を引き取り、残された12人の部下は、大きな塚を築いて宝とともに王を葬る。

北欧社会において、ヴァイキング時代(800～1050年)以前から、貴人の遺体を船に乗せて葬り、塚を築いて宝物を副葬する風習が存在したことを示すこの叙事詩は、吟遊詩人が語り伝えたものだが、サットン・フーの被葬者の来歴と性格を窺う上でことのほか興味深い。

サットン・フーの現地は、今は、ナショナルトラストの管理となり、新しいビジターセンターでは王が眠る船室や副葬品が復原され、遺跡も整備されて市民に公開されている。銀の兜を初めとする出土資料の多くは、大英博物館を代表する展示資料として、かつて暗黒時代とも呼ばれたイングランドの中世初期の歴史に光を与えている。